

～子供たちの夢をかなえる教師になる！～

# 東京教師養成塾通信

発行日 平成 28 年 7 月 16 日  
＜第 3 号＞  
発行元 東京都教職員研修センター  
研修部教育開発課  
電話 03-5802-0318

## ●第 5 回講座「授業づくりの基礎②～学校における道德教育と特別の教科 道德～」

平成 28 年 6 月 11 日（土）に、道德教育や道德の時間の目標、道德の内容、指導のポイントについて理解することをねらいに、第 5 回講座を行いました。

初めに、東京教師養成塾担当の関口純一教授が「道德教育と特別の教科 道德について」をテーマに講義を行いました。関口教授からは、道德に係る小・中学校学習指導要領一部改正の概要や道德教育と特別の教科 道德との関係について説明がありました。また、東京教師養成塾担当の信方壽幸教授からは特別支援教育における道德教育の位置付けについて話がありました。

続いて、東京教師養成塾担当の近谷幹男教授が文部科学省「わたしたちの道德」（小学校 3、4 年）から出典した「ヒキガエルとロバ」を題材に模擬授業を行いました。今回は、改正学習指導要領の D「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の中で、「生命の尊さを知り、生命あるものを大切にすること」の内容項目をねらいとして授業を実施しました。



－模擬授業の様子－

模擬授業では、導入、展開の前段、後段、終末の各段階でねらいや教材の提示、発問の工夫等の解説があり、塾生は学習指導過程と指導のポイントへの理解を深めました。展開の後段では、「命を大切にするために、どのようなことを心掛けたいか。」を考え、グループで発表し合いました。

講義終了後、塾生は「道德教育や道德の時間を充実させるために担任として意識すること」をテーマに班別協議を行いました。塾生からは、「説話に力を入れて、教師の経験を踏まえて伝えること」「学級だけ、個人だけでなく全体のこととして考えること」等の意見が出され、道德教育への理解を深めました。

小学校では、平成 30 年度からこれまでの道德の時間が特別の教科 道德として教育課程に位置付けられます。塾生の皆さんには、道德的価値に関わる問題解決的な学習や体験的な学習を適切に取り入れるなど、指導方法の工夫を図ることを期待しています。

### 【塾生の感想より】

考えさせ、議論を生むような題材を使って、道德の授業をやってみたい。道德的価値にせまることのできる発問を考えて、授業を実践することを意識したい。

## ●第 6 回講座「児童・生徒の学習状況の把握と評価の実際」 「思考力・判断力・表現力を身に付ける授業づくり～言語活動の充実をとおして～」

平成 28 年 6 月 25 日（土）に、児童・生徒の学習意欲を伸ばし、学習効果を高めるために必要となる学習状況の把握及び評価を生かした指導について理解することをねらいに、第 6 回講座を行いました。また、10 月 16 日（日）の公開ゼミナールで塾生が行う模擬授業の共通テーマである言語活動の充実への理解を深めるための講義が行われました。

まず、東京教師養成塾担当の茂木里美指導主事が「児童・生徒の学習状況の把握と評価の実際」をテーマに講義を行いました。学習評価の目的や妥当性、信頼性のある評価について説明があり、児童・生徒の学習の充実のために、教師が常に児童・生徒の状況を把握し、指導の改善へと生かしていくことが大切であるとの話がありました。

続いて、東京教師養成塾担当の菅野恭子指導主事が「思考力・判断力・表現力を身に付ける授業づくり～言語活動の充実をとおして～」をテーマに講義を行いました。教職員研修センターが平成 22 年度、23 年度に行った「言語活動の充実に関する研究」等をもとにした説明があり、教師が授業で言語活動を工夫することで、児童・生徒の思考力、判断力、表現力を高めることのできる話がありました。



－班別協議の様子－

講義終了後、塾生は「学習指導における評価と支援について」をテーマに班別協議を行いました。塾生から「児童・生徒の努力の過程を評価することが大切」、「児童・生徒に具体的な目標を設定して評価する」等の意見が出されました。また、公開ゼミナールに向けて、模擬授業でどのように言語活動を充実させるか、指定校での授業実践等を踏まえた話し合いが活発に行われました。

### 【塾生の感想より】

言語活動を取り入れることが大切だと思い、毎時間の中で極力取り入れるようにしてきたが、適切な活動を意図的かつ計画的に行う必要性を学んだ。今日の講座で学んだ言語活動をしっかりと理解して、授業実践を重ねたい。

## ◆ 児童・生徒理解を図る — 共感的理解・具体的なスキルの習得 — ◆

東京教師養成塾教授 牛島 隆文

「子供は褒めて伸ばす」という言葉があります。本当に褒めることで児童・生徒を伸ばすことができるのでしょうか。数年前になります。新聞のコラムで、日本の科学者グループが科学的な実験で『褒めて伸ばす』の妥当性を実証した」と紹介されていました。それは、キーボードを打つ速さを測定し、1回目を終えた後に褒められた人たちの方が、2回目に打つ速さが20パーセントも向上したというものです。人間の脳が褒められたことを「報酬」と感じ取ったことで伸びたのではないかと分析していました。

さて、塾生は、教師養成指定校で特別教育実習に取り組んでいます。その中で、塾生には、児童・生徒の努力している姿やよい言動等を積極的に捉えて褒めさせたいと考えています。しかし、よくない言動を叱る場面も少なくありません。この時に気を付けさせたいことが、一人一人の児童・生徒に適した褒め方や叱り方をすることです。

さらに、ここで重視することが児童・生徒理解です。児童・生徒理解とは、児童・生徒一人一人には異なる能力・特性、興味・関心、生活背景等があることを理解するとともに、児童・生徒一人一人の気持ちや願いを教育活動全体を通して共感的・肯定的・多面的・客観的・総合的に理解し的確に把握することをいいます。確かな児童・生徒理解をするためのポイントとして次の三点があります。

## 1 気持ちと願いをつかみ、サインに気付く感性を磨く

児童・生徒理解の出発点は、表情や言動に込められた気持ちや願いを正確に把握することです。児童・生徒の日々の様々な姿から気持ちや願いを正しく捉え、児童・生徒の様子を記録し、児童・生徒が発する小さな変化や思い、悩みのサインを察知できる感性を磨くようにします。

## 2 生活背景を理解するとともに本音を理解する

児童・生徒は自分自身のことや勉強のこと、友達関係のこと、家庭のこと等、様々な悩みをもっています。そして、児童・生徒の表面的な言動は本音と違うことが多々あります。児童・生徒の生活背景を理解するとともに、その様々な言動に込められている本音を的確に把握し、気持ちや思いを正しく理解します。

## 3 受容・共感・傾聴に努める

まずは児童・生徒を一人の人間として尊重し信頼することが大切です。そして、児童・生徒の存在をあるがままに受け止め、一人一人が発する言葉にしっかりと耳を傾け、すべてを受け入れ、感情に寄り添い、心を傾けて話を聴き、信頼関係を構築していきます。

塾生には、児童・生徒一人一人に寄り添い、しっかりとその子を支えるとともに、時によくない言動には毅然とした態度で叱ることができる教師、また、一人一人の児童・生徒をよく見つめ、個々の可能性を引き出す力量を備えた教師、さらに、褒め上手にして叱り上手な教師を目指して、特別教育実習ならびに講座に取り組ませてまいります。

## ◆ ねらいに即した授業づくり ◆

東京教師養成塾教授 味村 和行

塾生は、形成期の終盤を迎え、4月からの学びや成長を振り返るとともに、自らの課題を明確にして、伸長期に向けての準備をしているところです。個々、それぞれの課題がありますが、共通していることは、子供たちに「分かる」「楽しい」良い授業を創るということです。

## 1 「分かる」授業づくり

最も大事なことは、全ての子供たちが、本時のねらいを達成できるということです。それには、子供たちの主体的な学習を引き出す授業を創る必要があります。受け身の姿勢では、学習したことが定着しないことがよくあります。そのため教師は、子供が受け身になる「教える授業」から、進んで学び、問題を解決していく「考える授業」への転換を図っていくことが大切です。また、子供たちの「できる」を「分かる」と混同しないことも大切です。1年生の「引き算」を例に挙げます。本時のねらいは「引き算の意味が分かり、1位数－1位数の計算ができる」です。問題「お客さんが7人来ます。座布団が4枚あります。座布団は何枚足りませんでしょうか」。子供たちは、すぐに「 $7-4=3$  答え、3枚」とします。教師は、なぜ引き算の式になったかを問い、計算を確かめ、正答であることを確認します。しかし、本当に、ねらいである「引き算の意味」は分かっているのでしょうか。そこで、式に単位を付けさせると、全員が「 $7人-4枚=3枚$ 」としたのです。これでは、引き算の意味が誰も分かっていないこととなります。7人に必要な座布団は7枚なので、「 $7枚-4枚=3枚$ 」が正答です。つまり、加減法では、単位が同じでなければ計算できないのです。「できる」と「分かる」は似て非なるものなのです。このようなことを確実に見極めるためには、教材研究を深めること以外にありません。

## 2 ねらいを達成するための評価

本時のねらいに沿って、形成的な評価を1時間の授業の中で1～2項目くらい行います。授業の内容によって異なりますが、子供たちが個々に考えている場面、集団で話し合いをしている場面に行くことが多いようです。前述の「引き算」で言うと、初めの自力解決の場面で、評価規準によって机間指導を行い、必要によって個別指導を行います。「指導と評価の一体化」です。次に、単位について話し合う場面で指導と評価を行います。授業の中で適切に評価をし、それに対する指導を事前に考え、準備をしておきます。このように評価を意図的、計画的に行うことで授業のねらいを達成できるようにします。